

D-3 共働き家庭における親子の生活時間とその接点に関する研究(芥1報)
宇都宮大教育 金崎英美子

目的 共働き家庭においては親と子の接触時間が短く、そのことが子どもの人格形成に悪影響を及ぼすのではないかと心配されている。そこで本研究では共働き家庭を対象に生活行動時間の実態調査と意識調査を行いながら、親と子の接点の可能性について考察した。生活時間は職業により異なるので①サラリーマン家庭②自家営業家庭③農家④内職(パートも含む)に分け、今回は①について報告する。

方法 本研究の目的に応じた質問紙を作成。内容は生活時間に関するものと親子の接触に関する意識調査で生活時間については週日と休日の父母子の生活時間を比較検討し、意識調査においては不安感や育児態度などさまざまな角度から接点に関する問題を考察する。対象は保育所員の父母。

結果 ①休日の生活時間は週日とはだいぶ異なり、子ども達の生活のリズムは乱される②乳児(3才未満児)の場合には発達の特性から親と生活をともにする時間は短かいが、幼児はほぼ親の生活と一致する③家庭の生活は大人中心に動き、それに対する子どもへの心理的負担は「子どもへの甘やかし」や「何かを買い与える」「どこかに連れて行く」といった物的代償によって解決しようとする傾向が認められる④子どもとの接触についての不安感は父親より母親に多く認められ、特に芥1子の親にその傾向がみられる⑤子どもとの接触について不安を抱きながらも不安を解決する為の具体的な努力をしている者は少ない。